鈴木門三郎○中略

一瞽女之儀ハ、麥作綿作取入、又ハ秋作收納之頃ハ、最寄村々、勸進ニ相廻リ候間、多少ニ不限、麥綿籾差遣候得バ、右爲禮三味線を彈端歌を唄ひ、罷歸候由御座候、

右ハ座頭瞽女配當之儀、御尋ニ付、私支配所相糺候趣、書面之通ニ御座候、依之此段申上候、以上、

午七月　鈴木門三郎

〔擁書漫筆二〕下野國の宇都宮にて、めくら御前がふるくよりうたひつたへし、若宮の歌といふ二謠を、蒲生秀實がき、たもちて、うたひけるに、そのひとつはわかみやまゐり、

とのびとを、さきにたてゝ、わかみやまゐりを、まうせば、わかみやの、ばんばさきで、ごしよばこを、見つけた、かたよりて、あけて見たれば、いちぐんにより、ぎふにぐにを、たまはる、あなめでたゝ、わかみやまゐりの、ごりぎやう、

十六句にうたへり、○中略　二にはたまてばこ、

いとしちをごの、たまてばこの、たからものは、なに〳〵、ぎろみのかゞみが、なゝおもて、にしきおりが、やたゝみ、しろがねの、さをさして、こがねつるべを、くゝらせう、げにまこと、ちやうじやの、ぎんとも、よばる、

十五句にうたへり

〔兎園小說十二〕瞽婦殺賊

近比の事なり、武州忍領の邊へ、冬時に至れば、越後より來る瞽婦の、三絃を彈じて、村々を巡りつつ、米錢を乞ふありけり、或冬、忍領の長堤を薄暮に通過せるに、忽後より呼び掛くるものあり、瞽婦○此間恐有脫文即自ら吹くところの管頭（ガンクビ）を指し向くるに乘じ、瞽婦摸索し、我が烟草に火の通せざるまねして、大人口づから吹きたまへといふ、盜何の思慮もなく、力を入れて吹くに及びて、其機